

特定研究集会 中間報告（課題番号：2020C-03）

課題名：第 6 回表層地質が地震動に及ぼす影響に関する国際シンポジウム

研究代表者：岩田知孝

所属機関名：京都大学防災研究所

所内担当者名：岩田知孝・松島信一

研究期間：令和 3 年 3 月 15 日 ～ 令和 3 年 3 月 17 日

研究場所：京都テルサ

共同研究参加者数：140 名（所外 120 名、所内 20 名）

・大学院生の参加状況：15 名（修士 5 名、博士 10 名）（内数）

・大学院生の参加形態 [指導教員等との共同研究成果発表]

※新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、開催を次年度に延期した。

（令和 3 年 8 月 31 日～9 月 2 日に京都大学宇治おうばくプラザにてハイブリッド方式により開催予定）

令和 2 年度 実施状況

表層地質が地震動に及ぼす影響に関する研究（ESG 研究）の重要性は国際的には 1985 年メキシコ地震災害を契機に認識され、国内外の被害地震を踏まえて研究が深化してきた。ESG 研究に関してこれまで 5 回の国際シンポジウムが開催されてきた（1992 年、1998 年ともに日本、2006 年フランス、2010 年アメリカ合衆国、2016 年台湾）。第 6 回の国際シンポジウムを「30 年に及ぶ ESG 研究の進展：地盤増幅特性をいかに正確に予測出来るようになったか？」と題して、地震動を精度良く予測するために必要な最新の研究成果を持ち寄り議論するため、日本（京都）で 2021 年（令和 3 年）3 月に開催を予定して準備を進めてきた。残念ながら新型コロナの影響により、国際的な交流活動が著しく制限されていることから、開催方法も含め検討を進めた。研究参加者数が 150 人前後であることや、国際シンポジウムならではの、対面実施の可能性も視野にいれて、結果的に令和 3 年度に実施することとした。延期に伴い、共同研究の研究費は全額繰り越した。

令和 3 年度 実施計画

上記のような状況を踏まえて、令和 2 年度末から令和 3 年度にかけて、国内のシンポジウム実行委員会では開催期間と開催方式について、時々刻々変化する社会情勢を踏まえて議論を重ねた。研究シンポジウムであるため、研究成果は令和 2 年度の間報告を提出してもらっているため、その「鮮度」も検討項目の中にあった。

これらを総合的に踏まえて、一部のプログラムを対面で実施することを含めたハイブリッド方式による開催方法を、8 月 31 日から 9 月 2 日に実施することで決定し、現在参加登録を進めているところである。オンライン方式は、現在の社会情勢を踏まえると適切な手段の 1 つであるけれども、国際シンポジウムならではの、世界各国からのアクセスについては、時差を考慮したプログラム作成等を進めた。

このシンポジウムでは、2016 年熊本地震本震のターゲットサイトにおける地盤構造モデル同定シミュレーションや本震の同時シミュレーションを、事前に情報を提供した上で参加研究者が分析を進め、結果を比較することで我々の研究の到達点や再現性を試みるプログラムも含まれており、新たに得られる知見は今後の ESG 研究の重要なマイルストーンとなると考えている。